

---

# Fate/BattleRoyal

マングローブ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate / Battleroyal

### 【Zコード】

Z9510Z

### 【作者名】

マングローブ

### 【あらすじ】

正史とも通常とも異なる冬木の第四次聖杯戦争。七騎所ではない。

・・百騎もの英靈が霸を競う凄惨なるバトルロワイアル・・・

そんな折、令呪を意図せずして刻まれた魔術を使う私立探偵、鳴宮奏は気のりしないまでも生き残る為に参加を決意し最弱にして最強のキャスターと共に百組の殺し合いに身を投じる。

## 登場人物 設定（前書き）

身の程知らずにも・・・いえ、かなり無謀ながらこの度、Fateの二次創作に挑戦して見ました。はつきり、言いますが、私自身、原作の知識は乏しいながらももつ好き勝手に書いて見る事にしました。

初めてなので至らぬ事も多いと思いますが、私も原作知識を調べながら書いて行きます！

## 登場人物 設定

鳴宮奏  
なりみやかなで

【年齢】 22歳

【身長・体重】 180? 56?

【特技】 体術などの武術全般、身体強化魔術

魔術を使う私立探偵。令呪を刻まれた事で此度の聖杯戦争に氣のりしないながらも参加する事となる。

性格は基本的に仕事以外は無気力でズボラ。だが、異常なまでの身体能力をも誇つておりあらゆる武術と戦闘技術を身に付けている。

口癖は「まあ、一応」

### キャラスター

【マスター】 鳴宮 奏

【真名】 不明

【身長・体重】 160? 43?

【属性】 中立・中庸

【ステータス】 筋力 E 魔力 A++ 幸運 C 敏捷 B 宝具 EX

奏が召喚したサーヴァント。見た目こそあどけない少年だが、その物腰も話し方も子供離れしている。

かなり、飄々とした性格で悪戯好き。さらに現代への適応力も高く電化製品なども数日で問題なく使いこなしている。（主にノートPC、TV、TVゲーム、携帯など）いつ如何なる時も娯楽に興じる柔軟性（図太さ）の持ち主。口癖は「最弱のキャラスター。されど、最強のキャラスターだ」

ある部屋の床に異様な魔法陣を描き詠唱を唱えている男がいた。その男の外見は眼が隠れる程にボサボサの黒髪に服装は皺くちゃのポロシャツにジーパンと外見にはかなりの無頓着さが窺える。そして、彼の左手の甲には血のように赤い三画の幾何学的な刺青のような物が刻まれていた。それは彼がある凄惨な戦争のトロフィーに見染められた証であつた。そして、これはその凄惨な戦争を生き残る為に必要不可欠な駒を呼び寄せる儀式であつた。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ王冠より出で、王国に至る二叉路は循環せよ。  
閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

左手の紋様が発光し儀式がさらに進んで行く。

「Ann セツ an セツ gg」

「告げる」

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」  
周囲に風と魔力が立ち込めて行く。儀式はいよいよ、佳境へと入るうとしていた。

「誓いを此處に。」

「我是常世総ての善と成る者、我是常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言靈を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

詠唱が終わると同時に凄まじい閃光と暴風が炸裂し次に静寂が訪れた時には魔法陣の中央に一人の少年が立っていた。年齢は恐らく十五・六程。黒のローブを纏い、星のよう輝く銀髪に澄んだ碧眼。顔はまだ、あどけないものの、その表情と眼にはとても怜悧な物を感じさせ年齢不相応の迫力がこの少年には備わっていた。それもその筈、見た目こそ幼くともこの少年はれっきとした『人外の存在』に他ならないのだから……そして、少年はどこか不敵な笑みを零して口を開いた。

「問おう。君が私を現界せしマスターかね？」

「うん……まあ、一応」

呼び出した男は気のない返事で問いに答えた。それに対し少年は眼を丸くして問い質した。

「なんだい。その如何にも気の抜けた返事は？君自身が望んで私を召喚せしめたのではないのかね？」

少年が半ば呆れたように問うと男は男で左手の紋様 令呪を見せてウンザリそうな声音で言った。

「こんな物が唐突に刻まれたら呼ぶ以外にどんな選択肢が？」

「ふむ……自らの意思で聖杯を求めたのではなく聖杯の方が君自身を求めたと……？確かに難儀且つ災難だつたね。まあ、それも運のつきと思つて諦めたまえ」

少年は身も蓋もない……そして、さらにこう続ける。

「それに……その気になれば令呪を放棄する事とてできたはずだ。にも拘らず、こうして私を召喚したと言う事は君自身も聖杯を求める理由がある……と言つ事なのだらう？」

それに対し男は渋々と言つた声で……

「まあ……それなりに」

「相も変わらず氣のない返事だね……まあ、いい。取り敢えずは

マスター。君の名を教えてはくれないかね？」

「鳴富奏……」

「では奏。これで契約は成立だ。共にこの戦争を勝ち残り聖杯を手にしよう。では次は私が名乗るのが礼儀だが、真名は……今は伏せておくとしよう」

奏は相も変わらず氣のない声で問うた。

「何で？」

すると、少年は茶目つけ溢れた眼を輝かせて言った。

「その方が謎のサーヴァントって感じでカッコいいじゃないか」

「ああ、そう……」

奏はやはり、氣のない声で相槌を打つ。

「まあ、とは言えクラスは教えなればなるまいね。私は今回……と言つより私の能力に相応しくキヤスターのサーヴァントとして現界した」

その言葉に奏は少し、不安そうに尋ねる。

「キヤスターって……確かに、七つのクラスの中で最弱って言つ……？」

そうキヤスターは七騎のサーヴァントの中で最弱とされている。その主な理由は元が魔術師故に白兵戦には乏しいと言つ事……さらには言えばその一番の持ち味である魔術 자체も『三騎士』と呼ばれる高い対魔力を備えたサーヴァントには全く、役に立たないと言つ事だ。

奏は令呪が刻まれた日から聖杯戦争について出来る限りの事を調べた。故にその程度の知識は持つていたのだ。故に少し、不安になる。

やつぱり、聖遺物もなしつて言つのが無茶過ぎたか……

と、マイナス的な事を考え始めた奏に対し少年……いや、キヤスターは朗らかな声で言った。

「なに心配する事はない、マスター」

その言葉に奏が不意にキャスターの方を見ると彼は朗らかながらも不敵な笑みを浮かべて言った。

「確かに、この身は最弱の魔術師<sup>キャスター</sup>…されど、最強の魔術師<sup>キャスター</sup>だ。聖杯は必ずや我らに微笑むだろつ」

「正史とは違う第四次聖杯戦争が始まった。」

## 第一幕（前書き）

変な所があつたらすいません。

あと主人公チートです。本当にすいません・・・

## 第一幕

岩に刺さった剣の前に一人の少女がいた・・・少女はその剣を抜こうと手を伸ばした

「それを手にする前にきちんと考えた方がいい」

それを老人の声が止める。老人はこう続ける。

「その剣を抜いたが最後、お前は人ではなくなる。歳もとらず、ただ國の為、王として生きる他なくなるのだぞ」

それでも少女は頷かなかつた。老人はさらに言葉を尽くして説得する。

「その剣を抜いた先、お前の前には栄光と破滅が等しく訪れるだろう。それでも尚、その剣を取るか？」

すると、少女は笑つて言った。

「多くの人が笑っていました。それはきっと、間違いではないと思います」

そして、少女の人生はそこで終わつた

奏はパチクリと眼が覚めソファーから起き上がつた。そこは奏が事務所と住居を兼ねている部屋で大抵はここで寝食をしている。現在の時刻は深夜の三時。

さつきの夢・・・もしかして、キヤスターの?マスターとサーヴァントは意識がリンクしているから互いの過去夢を見る事があるってアレか?

しかし・・・あの夢つて・・・ん? そう言えばキヤスターは何処に

奏はふと、自らのサーヴァントの姿が見当たらない事に思い至り辺りを見回す。靈体化しているのだろうかと思ったが、訪ね人はすぐ現れた。それも事務所の入り口から

「やあ、お田覚めかね」

奏はまづ、キヤスターが両手に抱えている紙袋を見た。そして、問うた。

「その紙袋は何だ？」

「ああ、これかね？ノートＰＣと言つ物を買つて來た。これから戦争が始まる。ならば情報収集は必須だろ？」「ノートＰＣならとつゝ家にあるけど。と言つより金はないから？」

それ以前に店は閉まつてゐるだろ？」「

奏の言葉にキヤスターは少し、ギクッとした後、無駄に爽やかな笑顔で言った。

「それじゃあ早速、設定を始めよ！」

と紙袋からノートＰＣが納められた段ボール箱を取り出す。

無視された・・・

奏はどこか諦めたような顔で嘆息をつく。

一方、キヤスターは素早くＰＣを取り出し手際良く設定を進めて行く。

と言つたが、随分と順応性が高いサーヴァントだな・・・そりやサーヴァントは皆、英靈の座である程度は現代の知識を得て限界すると言つが・・・それにしたつて・・・

「それにしても魔術師キヤスターとも在りう者が機械を躊躇もなく使うとは思わなかつたよ。昨今の魔術師はよっぽどの物好きでもなければ手にも触れないって言うのに・・・

奏が呆れたように言つとキヤスターは設定を進めながら答えた。

「そうなのかね？それはいかんな・・・魔術師たる者、視野を広く持たねば。それに引き換え君は機械類にも躊躇なく手を出しているようだね。感心、感心」

「俺は別に仕事をする上で有益と思つたから魔術をかじつただけだよ。別に時計塔の連中のような『根源に至る』なんて『大層な理由で学んだわけじゃないさ』

すると、キャスターは興味深そうに奏を見据えて聞いた。

「ふむ・・仕事とはどのような事を?」

「探偵だよ」

「ほう・・明智や金田一のようなかね」

「どこで知ったんだよ、そんな事・・・と言つとかお前つて本当に頑応性高いのな・・・生憎と俺はそいつら程、頭が特別いいと言つわけじゃない。有り体に言えれば『何でも屋』だな」

「ふむ・・何でも屋?では犯罪の捜査を実際にしている訳ではないと?」

「馬鹿にするな・・一応、そう言つ依頼だつて来るさ」

すると、キャスターは首を傾げる。

「しかし、頭が特別いいと言つわけではないのだろう?」

「まあ、俺には頭に代わる物があるからな」

「頭に代わる物・・それは一体・・・ッ!」

そこでキャスターはサーヴァントの気配を感じ、奏もそれに気づく。

「サーヴァントか?」

「ああ、それもこの事務所の真ん前だ・・・舐められた物だな。さて、どうするマスター?私のようなキャスターの一般的な戦い方としては陣地を作つて待ち伏せるのがセオリーではあるが・・・」

「お前すっかり忘れてた物な」

奏が若干、青筋を立てて突つ込むとキャスターはあははと笑つて誤魔化す。だが、すぐにまた、あの不敵な笑みを浮かべて言つ。

「まあ・・慌てる事はないわ。たとえ、この身は最弱とは言え勝算がまつたくない訳でもない」

そして、二人が事務所の外へ出ると案の定、一人の男が仁王立ちしていた。一人はラテン系の容姿をしたドレッドヘアの男性。その

隣には圧倒的な存在感を放つ中華系の武者が控えていた。武者はとても大きな体躯をしており鮮やかな紅髪を後ろに二つに分け結い、赤を基調にした鎧を纏っている。

ドレッドヘアの男性が出て来た奏達に対し口を開く。

「へえ・・・こつちの誘いを蹴らずに出て来るのは中々に剛毅じゃねえか。取り敢えずは初めましてだな、俺はアレックス・マリオン。こつちは俺のサーヴァントのランサーだ」

ランサー・・・選りにも選つて二騎士クラスか・・・それにしてもアツサリとクラス名を明かして來たな。それだけ自信があるって事か。

今度はランサーの方が口を開く。

「次は貴様らが名乗るのが礼儀と思うが?」

その鋭い一瞥をまともに喰らつた奏は内心、気圧された。

凄い迫力・・・ツ!改めて思い知るが、これが英靈サーヴァントかツ!!

奏は敵の霸氣に呑まれそうになりながらも名乗る。

「俺は鳴富奏。こつちはサーヴァントのキャスターだ」

すると、ランサーはフンッと鼻を鳴らして吐き捨てた。

「選りにも選つて、最弱のキャスターとは・・・つまらん」

すると、キャスターも挑発するように笑つた。

「ふつ、早計は余り、感心しないな。如何にこの身は最弱でも戦いようがない訳ではない」

「ほう・・・」

ランサーが值踏みするような眼で見るとキャスターはその威圧がこもつた視線を物ともせずに奏に言つた。

「マスター、宝具の開帳を許して貰いたい」

その言葉に奏は静かに頷く。すると、キャスターは右手をかざして魔力を放出し宝具を具現化させる。その形が露わになつた時、この

場にいる全員が眼を疑つた。なんと、それは剣だつた。一振りの剣は岩に刺さつた状態でこの場に具現化されたのだ。

この剣はさつきの夢で見た・・・

そう、この剣はまぎれもなく奏が先程、見たキャスターの過去夢で少女が抜いたであろうあの岩に刺さつた剣であつた。

それを見た一同は驚愕する。白兵戦とは無縁に等しいキャスターが剣の宝具を持つなどと・・・！

「これぞ我が第一の宝具『勝利すべき黄金の剣』<sup>カリバー</sup>！…ああ、マスターよ。この剣を取れ！」

「え？俺がッ！？」

奏が思わず面を喰らうとキャスターは大声でさらに促す。

「早くッ！」

その声に奏は半ば、自棄になつてその剣・・・<sup>カリバー</sup>勝利すべき黄金の剣の柄を握り岩から引き抜いた。すると、その剣から大きな魔力が魔術回路を通して身体中に流れて行くのを感じた。

この宝具・・・もしかして

奏の考えを読むようにキャスターが肯定する。

「そう・・・これは私自身が使う事を想定された宝具ではない。この宝具の真の意味はマスターとの契約を結んだ後にこゝにある」

「つまり<sup>カリバー</sup>」

奏は勝利すべき黄金の剣を手にランサー目掛けて突撃する。その無謀とも言える行動にアレックスもランサーも面を喰らうが、それも一瞬だつた。奏は人間とは思えない速さと剣戟を繰り出しランサーはそれを紙一重で避けた。

「マスターを強化する為の宝具つて事か・・・一応」

奏は相も変わらず氣のない声だったが、その戦闘態勢は微塵の隙も

なかつた。それを見たランサーはこれは決して一筋縄では行かない事を察した。

「主よ、こちらも宝具を開帳するぞ・・・あの小僧・・宝具で強化された事は勿論だが、あの小僧自身の力量もまた、侮れん」

「へいへい、あんの方が戦闘のプロだ。任せるよ」

アレックスは溜息を付きながらも渋々了解した。ランサーは右手にその巨躯に相応しい巨大な戟を具現化させた。

あれつて方天画戟つて奴か・・・と言つ事はあのランサーの真名つて・・・

「考え事とは余裕だなツ！」

そこで奏の思考は途切れた。ランサーの凄まじい突きが迫つて来たからだ。しかし、奏はそれを考え事の途中だつたにも拘らずそれを読んでいたかのように避けた。これにはランサーもかなり、驚いたのか眼を剥いている。奏はその隙にと剣戟を繰り出しが、勿論、そう易々と殺らせる程、ランサーは甘くはない。忽ち戟をその刃に合わせる。

そこからは凄まじい剣戟の打ち合いだつた。随所に火花が飛び散り、互いに際どい一撃を何度も繰り出して行く。その場に他のマスター やサーヴァント達がいたら皆一様に驚愕したろう。何せ、生身の人間が如何に宝具の助けがあるとは言え、サーヴァントと互角に戦うなどと・・・

しかし、一番に驚愕しているのはランサーの方だった。

この小僧・・・多分に宝具の助けがあるとは言えこの俺とここまで打ち合えるとは・・・ほぼ互角・・いや、僅かに俺を圧してすらいる！

それにこ奴の動き・・まるで、俺の繰り出す斬撃の一つ一つを見透かしているかのようではないかツ！？

そう見透かしているかのようではなく現実に見透かしているのだ。これぞ奏が頭脳に代わると言つた奏自身の起源『予知』であった。奏はそれによつて対象や物事の事象を先取りする事によつてあらゆる捜査を遂行し時には障害に成り得る人間を打ち倒して来たのだ。おまけに彼は身体の強化に特化した魔術師でもある。さらに、そこへキヤスターの宝具による強化補正によつて今の奏の戦闘力はサークルに迫る物となつた。

「チツ！調子に乗るなツ！！」

ランサーは一際大きな力で戟を振るい奏を薙ぎ払う。奏は後ろに吹き飛ばされながらも綺麗に着地する。

一方、ランサーは一層に鋭い視線で奏を射抜く。

「小僧・・・遊びは終わりだ」

そう言つた途端に戟の形状が『』の形に変化した。

「なツ！」

奏が面食らつているとランサーは殺氣がこもつた声で『』へと変化した己の得物をつがえながら言つた。

「小僧・・・お主の技量、人間風情の身でよくぞ、ここまでと讃め  
てやる。だが、貴様ができるのも所詮はここまで・・・我が宝具『  
軍神五兵』のスキル・・・必中無『』によつて引導を渡してくれる」

そう告げた瞬間にランサーは矢を放つた

『』と化したランサーの宝具軍神五兵から巨大な弓矢が常人などでは到底、眼にも止まらぬ速度で放たれた。

奏は己の起源『予知』と身体強化魔術を最大限にまで酷使する。巨大な弓矢がかなり速めのスローモーションとなつて奏の視界に映る。奏は宝具勝利すべき黄金の剣を突きの構えで繰り出し弓矢の軌道をギリギリで逸らし、弓矢は近くの建物に直撃した。

ランサーはそれを見て感歎の声を上げる。

「ほう・・・今のは紛れもない必殺の一撃だったのだが・・・つくづく楽しませてくれるな人間。だが、一度目も同じように出来るか？」

そう言つてランサーは再び矢をつがえる。奏も再び、臨戦態勢を取る・・・が、その戦いを一つの声が押し止めた。

「おいおい、いけないなあ。こんな街中で戦闘なんて・・・公衆の面前において魔術の行使はご法度のはずだろ?」

その場にいた四人はその声のする方を振り向くとそこには貴族然とした服装に身を包んだアッシュ・ブルーの短髪の男がいた。そして、隣には白銀の鎧を纏つた如何にも騎士然とした青年が控えている。恐らく彼のサーヴァントなのだろう。

一方、アレックスはその男を見るや・・・

「アンシェルツ！テメエまでこの戦いに！」

「アレックス・・・それはこちらのセリフだよ。落伍者である君が無謀にも聖杯を求めようなどとはね」

アッシュ・ブルーの男 アンシェルが嘲笑も露わに言つてアレックスは乱暴な身振りで怒鳴る。

「つむせえッ！そっちこそボンボンが実戦に出ようなんて笑わせるぜ・・・いつそここで首を落としてやろうか？ああッ！？」

すると、アンシェルはほとほと呆れ果てたと言わんばかりの声で言った。

「その前に君達自身の首が監督役や他のマスター達の手によつて落とされるとは考えないのか？この惨状を見たまえ」

そう促され自分達の周囲を見ると先程の弓矢を別方向に逸らした結果、逸らされた弓矢が直撃した家が全壊していた。それに耳を澄ませば周囲も騒ぎ始めていた。

アレックスも舌打ちしながらも漸く自分の迂闊さに気付いた。アンサーに靈体化を命じてその場を後にして、場には奏とキヤスター、アンシェルと彼のサーヴァントのみが残つた。

アンシェルは奏を踏みにするように見つめた後に口を開いた。

「初めてだね・・・鳴富奏くん。私はアンシェル・ジルヴェスター・アンシェルの紹介を受け白銀の騎士 セイバーは自らも名乗る。

「お初にお目に掛かります。アンシェル様の従者を務めるセイバーと申します。どうか主の良き好敵手で在らん事を」

「は・・・はあ」

奏は思わず間の抜けた返事をしてしまつ。だが、アンシェルは含み笑いを浮かべながらも言葉を続けた。

「それにしても先程の戦闘だが、実に恐れいつたよ。宝具の助力があつたとは言えサー・ヴァント相手に・・・それもあの呂奉先を相手に互角に渡り合うとは・・・」

「あんたも気付いてたのか？ランサーの真名を」

「それは勿論、の方天画戟の宝具を見て気付かない方がどうかしているだろう」

その口振りだと今まで自分達の戦いを見物していたらしい。

「諫めておいてその実は見物か・・・狡猾だ事で」

奏が皮肉を込めて言うとアンシェルは意にも介さず笑いながら、いけしゃあしゃあと言った。

「ははは、お陰でかなり興味深い物を見れたよ。なあ、そう思つ

だろうセイバー』

突如、話を振られたセイバーは僅かに眉を動かすが、何も語らない。奏はそれに少し違和感を感じたが、アンシェルはそれで話は終わりだと言わんばかりに背を向けて最後にこう言った。

「それでは私はこれで失礼するよ。そして、鳴宮くん……気を付けたまえ。此度の第四次聖杯戦争は過去の聖杯戦争とは何もかもが違う

その言葉に奏とキャスターが訝るとアンシェルは口元をにたりと歪めて告げた。

「私の調査で本来、七人のみに配当される令呪が私達を含む百人の魔術師に配当された事が判明した」

「は？」

奏は思わず間の抜けた声を出した。『何の冗談だそれは？』と言わんばかりに……だが、アンシェルは確信がこもった声でさらに続けて言つ。

「つまり、百騎もの英靈サーゴアントがこの冬木の地に召喚され霸を競い合つ……今だかつてない文字通りの大戦争となる。当然、それだけの数の英靈達が戦うのだ。被害や爪痕は冬木の地だけには止まるまい。日本全体……いや、下手をすれば」

「ちょっと待て。在り得ないだろう、そんなの……いくら聖杯が『万能の願望機』だからってそんな数の英靈を現界させるなんて事ができるわけ……」

「フツ、在り得ないかどうかは君自身も直に分かる事だろう……尤も君達がそれまで生き残つていればの話だが。それでは次は戦場にて相見えるとしよう」

それだけ言うとセイバーを伴い去つて行つた。

「マスター、私達も行くとしよう。残念だが、君の家に戻る事はもうできない。彼の言が本当ならば君の周囲が危険に晒されよう。それに彼が言つていたように直にここへ人が来る」

「ああ」

キャスターに促され奏はその場を後にしながらもアンシェルの言葉を頭の中で反芻する。

百騎もの英靈セーヴァントが殺し合つゝ笑えない冗談だな……

それと同時刻……

「で・・どうだセイバー。アレはやはり、本物なのか？」

アンシェルが問うとセイバーは簡潔な調子で答える。

「はい、ランクこそ劣化していますが、アレは紛れもなく私のかつての王が持つべき宝具。少なくとも、キャスターが所有する謂れなどない宝具です」

すると、アンシェルは面白そうな顔になつて言った。

「ふむ・・・かつて、騎士王の臣下だった君としては心外なのかね？」

セイバー・ガウエイン

「いえ・・・ただ、解せないと言つだけの事です我が王。私は貴方の剣。そこに余分な感傷など一切ありません」

セイバーは理路整然と答える。ますます面白いと言わんばかりにアンシェルは笑みを広げた。

「ふむ・・・それで君はあのキャスターに見覚えがあるのかね？」

「いいえ、初めて見た顔です。私の知る限りにおいて円卓の騎士団にもあるような者はおりませんでした」

その答えにアンシェルは一瞬、考え込むような顔になるが、それもそこまでだった。すぐに決意に満ちた顔になつて己の騎士セーヴァントに告げる。「そうか・・・まあ、その件はいい。それよりもこれから戦略を練らねばなるまい

「御意」

セイバーはそう答えたが、内心は驚愕と共にある懸念を抱いていた。

あのキャスターに見覚えがない・・と言つのは嘘ではない。事実、

私はあのよつな者の顔は知らない。だが、あのキャスターの雰囲気と併まいは誰かを思い出せる……

いや、そもそもアルトリア様以外での剣を宝具として持ち、且つ魔術師のクラスと来れば該当する英靈など私の知る限りにおいてはたつた一人しか……いや、まさかとは思うが……

セイバーは疑惑を抱きながらも考えを打ち消し主の後に従つた。

「まず、これから戦いを勝ち抜いて行く為に先程、君が使った宝具について説明しておく」

拠点を変えやつと、落ち着いた時、キャスターがこう切り出した。「ランサーとの戦いで君が使った宝具『勝利すべき黄金の剣』は私が使う事を想定された宝具ではないと言つたが、これには語弊がある」

「と云つと？」

「要するにアレは本来、私が所有する宝具ではない。アレは元々、ある剣の英靈が持つべき宝具なのだ」

「それじゃあどうして、魔術師の英靈であるお前がそれを持つてるんだよ？」

尤もな戻いだ。白兵戦向きではないキャスターのクラスが剣の宝具を持つなんて道理が本来あるはずもない。

「まあ、私もあるの剣には多少なりとも縁があつたのでね。一応は私の宝具として昇華されたのだろう。それはそうとアレの宝具としてのスキルだが、第一にマスターである君が武器として使う魔術礼装となる事。第一にそれによって一時的に身体能力などがサーヴァントにも迫る程に強化される。この一点だ。もつとも、それとて本来の用途ではない。故に宝具としてのランクも本来よりも劣化していりし何より制限時間も設けられている」

「制限時間か……もつともだな。そんな都合のいい物であるはずもない……で、その時間はどれくらいだ？」

「ジャスト五分。先程はかなり、ギリギリだった」

キャスターがキッパリと答える。すると、奏は苦笑して言った。

「要するに俺はアンシェルに救われたって事だな・・あのまま使つていたらどうなつていた?」

「恐らく宝具から流れ込んで来る魔力の圧力に魔術回路が耐え切れずオーバーヒートを起こしていただろう」

「そう言う事は召喚された最初に言つてくれ・・・」

アツサリと今頃になつてそんな事を言つてくれる己のサーヴァントに奏は頭をかきながら嘆息を付く。

「この際に聞くが、お前は他にどんな宝具を持つているんだ?」

「秘密だ」

キャスターは意地悪く即答する。これには流石の奏も苛立つた声で詰問する。

「おいッ! お互いの命がかかつてているんだぞ!」

「教えた所でどうなる訳でもない。私の宝具は対魔力を持つ三騎士クラスにはほぼ効かないし、まあ、とつておきの宝具なら話は別だが、とつておきだけあつてあれは魔力の消費量が激しい・・その上、一度でも使えば私の真名も瞬く間に敵に知れよう。ましてや、此度は七騎所か百騎ものサーヴァントが参加するともなれば先は長い。少なくともこのような序盤で手の内を晒すべきではない

「そりやそつだが・・・」

「とりあえず、今日は眠るといい・・明日からは戦争だ」

今日ばかりは己のサーヴァントの言つ通りにするかと奏は再び、眠りに付く事にした。そして、奏が寝静まつた後、キャスターは一人佇むように呟いていた。

「百人の魔術師に百騎のサーヴァントか・・・やれやれ、何やらきな臭くなつてきたな・・・」

その頃、ある人気のない納屋では一人の男がサーヴァントの召喚に臨もうとしていた。

男の名は間桐雁夜。本来なら御三家の一角、間桐家の頭首となるはずだった男・・・だが、間桐の陰惨な魔導を嫌い家を出奔した。その後は普通の日常を手に入れるはずだったのだが、雁夜自身でも何故かは分からぬが、独学且つ独自に魔術の修練を積み始めた。何故かは雁夜自身も分からぬ・・・だが、その時は間桐の家を離れて尚、そうした方がいいと思えたのだ。

そして、今・・その直感は決して間違いではなかつた事を雁夜は知る。

幼馴染でありますと自分が想いを寄せて来た女性・・遠坂葵。その娘である桜が選りにも選つて間桐の家に養子に出されたと言つ・・あの糞爺の下に・・・ッ！

間桐の家を出た時、自分は余りにも無力だった・・・だが、今は違う修練は元より経験も積んだ。さらに言えば己の右手に現れた令呪だ。聖杯戦争の参加者に配当されると言う魔力の塊・・これならサーキュラントを召喚し使役できればあの化け物を・・・間桐臓硯を倒し桜ちゃんを救う事ができるかも知れないッ！

雁夜は藁にも縋るように召喚の為の魔法陣を描き詠唱を唱えた。  
「誓いを此処に。」

「我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

そこで雁夜は呪文を付け足す。いくら修練を積んだとは言え時臣と言つた他の参加者に比べたら自分の魔術師としての技量は些か劣る。まして、それが聖遺物なしとなれば尚の事。ならばステータスの大幅な底上げがどうしても必要だった。

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者」  
いよいよ召喚は大詰めだ。雁夜はさらに力を込めて最後の一節を唱える。

「汝三大の言靈を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

暴風と閃光が納屋を包み静寂が訪れるとそこには禍々しいまでの漆黒の魔力に包まれた黒甲冑フルブレートに身を包んだ大柄の騎士が立っていた。

やつた・・成功だッ！

雁夜は召喚が成功した事に安堵の笑みを浮かべたが、次の瞬間にその顔は驚愕へと染まった。何故ならば

「今再び・・・問おう、貴殿が私のマスターに相違ないか？」

言葉など知らぬはずの狂戦士バーサーカーが口を開き問うていた・・・

## 第一幕（後書き）

雁夜さん・・・かなり改竄しています・・・本当にすいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9510z/>

---

Fate/BattleRoyal

2012年1月1日21時48分発行